

最近のトルコ情報

今どきのトルコ

取材・文 / B B I 編集部

今年も、夏の猛暑の後、秋らしい澄んださわやかな日が続いている。紅葉が色を深め、枯葉が舞うイスタンブル。トルコ東部からは初雪の知らせも届いた。さて、今どきのトルコでは、どんな出来事が起こっているのだろう。

レヴェントに完成したイシ銀行中央センタービル。



マンハッタン イスタンブル

九年間の工事の末、二年九月一六日イスタンブルの新市街にメトロ（地下鉄）が開通した。現在料金は大人三万トルコリラ。ジェットン（専用コイン）を買つか、アクビル（交通機関共通パス）を買って利用する。開通式ではタクシム駅を中心に、歌手を呼んだ盛大なコンサートが一日中行われた。開通した日と翌日は市民には無料。市民は、地下鉄の深さや、早さに声をあげて、感動した。地下鉄が結ぶレヴェント地区はここ数年超高層ビルの建設ラッシュが続いており、一月にもトルコ最大級の銀行イシ銀行

の中央センタービルが建設された。レヴェント周辺では五階建て級のビルの工事が行われており、このままていくとレヴェントは新宿の高層街を超える超高層ビル地区になりそうだ。

国勢調査が行われた

四年に一度トルコ国内で行われている国勢調査が一月二二日行われた。その日朝五時から夜七時までは国民全員外出禁止、外出した場合には罰金刑にあたるという厳しい警告が出された。当日はツーリストと特別許可を事前に受けている人々のみ外出が可能。トルコは一日中静まりかえった。

四年前の国勢調査のときには、四年後はコンピュータシステムに切り替えると言われていたにも関わらず、やはり今回も係員が、家の扉を一軒一軒回って歩く方法で行われた。その際の質問には、名前、生年月日その他

職業、学歴等の項目があるが、全て口頭質問。証明書を提示する必要も何もない自己申請であった。

今回の調査の正式な結果は来年発表される予定である。

断食月がやって来る

今年のラマザン月が、一月二七日から始まる。今年はお正月明けと、年末と年に二回ラマザン祭を迎える珍しい年でもある。断食は三日間、陽が上ってから日没まで、一切何も口にしないという、イスラム教の主な戒律の一つ。三日の断食月の後には、三日間ラマザン・バイラム（断食祭）を祝つ。

昨年は記念すべき一年の年明けであったにも関わらず、夏と冬の大地震で亡くなった人々に慶弔の意を表すことと、断食期間にあたるということとで年末年始の祝賀は少なかつた。今年はやつと断食祭が年末の二月二七日から二九日までとお正月前に訪れる為、賑やかな年末年始が期待できる（それでも日本のお正月のような盛り上がりは期待できないのだが）。また、三日間の断食祭と、年末の休暇（トルコの年末休暇は一月二日の一日のみ）を合わせて、国外、国内で旅行を楽しむ計画の人が多く、一月上旬からすでに、イスタンブルとヨーロッパ各地を結ぶ飛行機は満席状態。市民レベルでのトルコの景気もやや上向きになってきたような気配である。

新しい地震断層地図が発表された！

昨年八月一七日のマルマラ大地震後、関係者は次ぎに起こりうるイスタンブル大地震の規模と時期について、様々な見解を述べていたが、マルマラ海

底を走る断層の詳しい調査がなかった為、予想に基づく見解が多く、イスタンブール市民を不安に陥れていた。

さて、今回の調査結果が、市民を安心させるものか、どうかは別として、九月二日から一九日の間、フランスの海洋研究所の調査船によって行われたマルマラ海海底調査の結果、下のよつな断層地図が発表された。

調査によると断層が最もイスタンブールに近いところは、イスタンブールの南沖にあるプリンス諸島と、イスタンブールの西ビュクチェクメジェであり、海岸沖十メートルであることがわかった。

さらに調査は続けられているが、調査に参加したイスタンブール工科大学のジェラル・シエンギョル教授は、「今回の調査に基づくと、もし仮にマルマラ海の海底の断層が二回に分かれてくれた場合、断層が一番近いイスタンブールの海岸でマグニチュード七度、一回で全てくれた場合、マグニチュード七・六度の地震が起こることが予測される。」と発表した。

二階建ての一軒家でなく、四〜一階建てのアパート形式の住居が多いトルコでは、前回の地震後、各アパートの管理人達が共同で地震に対する地盤の固さを中心とした耐震度を関係機関に調査してもらった動きが出た。

しかし、この調査の他にも建物の耐震構造、強度、老朽度等全てを考慮しなければならず、マルマラ大地震はイスタンブール市民の住居に対する考え方を一変した。

昨年の大地震でも被害を受けたイスタンブールの西部では軒並み地価が落ち、それまで高級住宅地とされていた、空港周辺のアタキョイ、イエシルキョイ、フローリアは、地震直後から、第一危険地域と噂され、次々に発表される調査結果に影響されてか、引越りする人々も増え始めた。

一方、この地震騒ぎを機に一戸建てヴィッラ（邸宅）に人気が集まり、元来高級住宅地であったエティレル、レヴェント等新市街北部のヴィッラは、さらに価値が上がる結果となった。

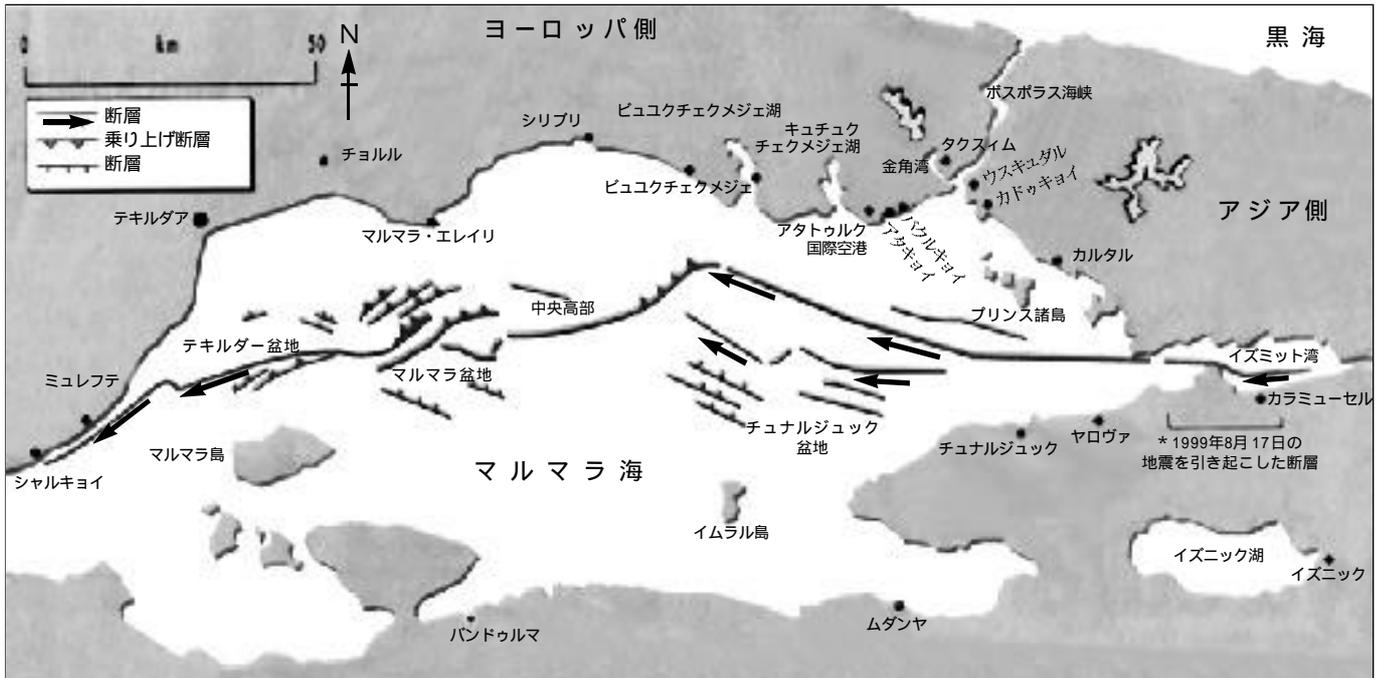
ちなみに、高級住宅地と言

われるアタキョイの海岸側にある築三年の一階建て、全五四世帯のアパートで、耐震検査を行ったところ、「コンクリートの老朽による被害が予想され、震度七度以上の地震が起ると崩壊の恐れがあるとされた。ビルを補強する為の工事に一世帯あたり六

米ドルの費用が必要である」との結果が出たが、実施は非常に難しいと見られている。また政府は、イスタンブールの全ての世帯に、地震保険への加入を義務付ける法案を出し、一月一日から実施としていたが、体制の未完全を理由に三ヶ月先へ延長した。

昨年の地震と関連して、イスタンブールでは、今後二年間、大きな地震が来なければ、とりあえず断層の活動は一時おさまったと見てよいとされ、その後一五年間のうちに起こる確立が高いと言われている。

とにかく、今後三、四年のうちに必ず、イスタンブールで七度以上の地震が起こることは間違いないよつで、イスタンブールに住む人々は、常日頃から、地震対策を怠らないよつにしたい。



* 2000年9月24日ヒュルイェット新聞より / 文献「ジユムフリイェット新聞技術雑誌」